
ネギま！ てきとーにエンジョイするぜ！

冥沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ てきとーにエンジョイするぜ！

【Nコード】

N 4 6 7 8 M

【作者名】

冥沙

【あらすじ】

ネギま！の世界でチート主人公が過ごします。基本適当な主人公なのでそんなにシリアスにはならない：はず！ だれとくつつくかはまだ未定です。原作開始と同時にスタートします。ハンターハンターの念能力も使う予定です。

はじまり 1 (前書き)

主人公最強系です。ネギアンチを含みますので苦手な方は戻るボタ
ンをどうぞ。 (と考えていたのに現時点では全くネギアンチ要素
はないです)

後々、ギャグのノリでBL要素がはいるかもしれないのですが…。
そんなにひどくないと思います。

「起きやがれ、クズ。」

いだっ。蹴られたみたいで背中が痛い。なにすんだよう！

というか、目の前にいるこいつ誰だよ。かっこいい顔しやがって、ムカつく！ もてない男の敵め！

「俺はこの世界の神だ！！！」

いったー、痛い…。うわ、なにこいつ…。中二病ですか！？

それともDEATH NOTEのファンなのか！？

「中二病？ 俺は中学二年生じゃねえ。」

知っとるわい、そんなの見りゃ分かるって。

ところで、まじでだれだこいつ。神とか…ありえねえし…！

「うそじゃねえよ。ホントの神。」

自称神は拗ねたように言って、突然俺の腹を刺してきた。

いきなりなにすんだっ。ぐばあっ。

どうしよう本当にいたい

俺は刺されたところをおさえてその場にうずくまった。

視界がぼやける…。

「ケアル」

だが自称神がそういうとすぐに俺の怪我は治った。あんなに痛かったのが治ってる…。すごい…！

だとしても刺すなんて…。車ときはすぐに意識がブラックアウトしたからまだ良かったけど…。

なんなのこいつ。ありえない。

「これで俺が神だって分かったろ？ 俺はアニメ・ゲーム・まんが・ラノベ…・etc に関する神なんだよ。それについてならなんでも叶えてやれるぞ？ ちなみに今使ったのはFFだな。それで…」

「なんで刺した。」

さえぎって俺がすこし苛立った口調で言うと、

「治したんだからいーだろ？」

開き直りやがった。うぜえ。

しかも、そういうのの神って…。偉いのかどうか分かんねーな。

日本以外で力あるのかあやしい…。

でも信じるしかないよな； ケアルとか普通ならありえないことだし。

それにちよつと面白そう…。刺したのはむかつくけど…。願いをかなえる、かあ…。

「何でも叶えてくれんの？」

「ああ、いいぜ。そんなことしてやる理由は、俺が神だからだ。時間も永遠にあってアニメ．．．e t c を二度見、三度見、三十度見ぐらいしてきたんだよ。つまり飽きた。よってお前、ちよつとある漫画の世界に行ってきたてきとおもしろいことしかしてきてくれ。ちゃんと俺が楽しめるようにな。」

「ちよー自分の都合じゃん！ でも何で俺なの？」

「だって死ぬ前にチートほしいって思ってただろ？ 叶えてやろうじゃん、ってな。」

「あ、いや、まあ…。たしかになあ…。」

チートっていつでも違うんだけど。二次チートと剣道チートは違いすぎる…。

ま、正直剣道でチートなんてしたくないけどね。自分の力で勝って

こそ、だよな。

とわいえ二次でそのまま放り出されたらどっかで死ぬだろ。

こういうのは原作から逃げても追ってくるものなんだよ…。

「文句あんのかよ？」

「ないです、ないです。すんませーん」

やっべ、ここで怒らせてチート能力なしで行って来いとかになった
ら俺がヤバイ。

とりあえず謝っておけ…。

「まあいい。さっさと願いを言え。」

「ネギまの世界がいい」

「はいOK。」

「吸血鬼の真祖」

「はいムリ。」

「次は…。って！　なんで吸血鬼の真祖はダメなんだよ。」

「神の俺からすると不老不死はつらいぞ？　年齢を自由に調節でき
る、とか身体能力すごっ、とかの方がいいと思うけど。」

たしかになあ…。ずっと生きてると疲れるよなあ。

エヴァンジェリンとか尊敬する…。俺には到底できないことだ…。

「んじゃあ、それでいいや。次は、H×Hの念能力。シズクとクラピカとマチ、シャルナークのやつよろしく。ついでにオリジナルひとつ作れるようにしといて！」

「あと、エヴァみたいな別荘をくれ。」

「多いな…。まあいいけどさあ…。」

「全部OK？ まじで？ ありがとー！ あいして…」

言い終わる前にぼこられた。ひどいなあつ。

「んでいつに行くんだ？ 原作前？」

「原作のときでいいや。俺27巻までしか読んでないからさ★原作前行っても知識あやふやなんだよ」 原

「おう分かった。じゃあ行って来い！」

神がどこからともなくナイフをとりだした。そして…。

グサツ。

いたああああい（泣） やっぱるかよおお

なんで刺すの〜!？ 神のばかやろー！ー

そうして俺はネギまの世界へ旅立ったのであった……。。

はじまり 1（後書き）

まだもうひとつの作品が終わってもいないのに連載始めちゃいます！
更新スピード遅いと思いますが、できるだけがんばります。
ちなみに主人公の言っていた27巻までしか読んでいないというのは作者のことです…。他の方の作品で知っていることもあるんですが…。おかしいところが出てくるかもしれないので、指摘お願いします。

冥沙

すいません「はじまり」「原作こんにちは」のとき（一話〜十一話）のクオリティがひどすぎるので時間があったら少しずつ書き直していきます。

冥沙 2／18

はじまり 2

「んっ？」

俺は目が覚めたようだ。ここがネギまの世界なのか？

…ところで、さっき刺されたの痛かったなあ…。

何で刺すんだよ。刺さなくても別にネギまの世界に送り込めるだろうが！

「刺すのが趣味だからだ。」

うわあ、なんだよ。後ろから変な声がする！！

「きゃー、変態よー！」

「なんで女言葉なんだよ、おめえの方がきもい。」

振り向くとそこには先ほどの俺様な神様がいた。

…………ミニチュアで。

「うわw なにコレちょーかわいい。」

そう言って俺は、神様（ミニチュアver.）を持ち上げた。

仕方ないじゃん、かわいいんだよ！　／／

「やめやがれ、刺すぞ。」

こわっ。中身はやっぱり変わらないんだね…。

でもこんな大きさじゃあ全然威厳なんてないから大丈夫…なはず。

…だってチャチャゼロぐらいだよ？

「お前を刺すのは最高に楽しい。」

かつこよさ全開だったあの神がミニチュアサイズだよっ？

顔もこどもっぽくなってて似合ってるし（笑

「次はどこを刺そっかな〜♪」

ほら、ギャップギャップ！　俺様なのにかわいいー、きゅん、みた
いなね。

俺が女の子だったらまじで家に欲しいわー。

男だっていいじゃん、だって？　いや、ね、男の部屋にお人形さん
はちよっと…。

いいんだけどさあ、友達来たときにけっこうハズいんだよ。

「心臓だな、もしくは頭を直接狙うか…。」

「：怖い発言ばっかしてんじゃねえよ！ スルーし続けるにも限界があるって。せっかくお前のかわいさを必死に語ってやってんのに途中途中で怖い言葉はさむのやめてくんねえ！？」

「嫌に決まってるだろ、これが俺様だ。」

「一人称俺様とかいたいわゝw」

「お前にはこれからもっと痛い思いをさせてやるから安心しろ。」

「「いたい」の意味ちがう！ ：で、何のためにあんたは いるんだよ？」

「何のためでもないぜ？ 改めて考えると退屈なら自分も行っちゃえばいいんじゃない？ ということであってただけだ。」

「俺が来た意味ないじゃん…。最初からそうしてろよなあ。」

神様にも仕事があるから俺に頼んだのかと思ってたんだけど。

「俺はマンガ：etc の神だからよ。勝手に作ってくれるから正直俺にはそんなに仕事がないんだ。だから暇なんだよな。」

「じゃあ俺と一緒に行動すんのか？」

「とはいえある程度の仕事はあるからな。何もかも一緒に行動できねえんだよ。俺は、たまにお前と行動するときもあるかも、程度に考えておいてくれ。仕事がないときには帰るからさ。」

「ふーん…分かった。で、何でミニチュアなの？」

「お前に力を使っているからだ。自分にまで手が回らねえ。」

チート能力のせいかな。たしかにあんだけ頼んだら大変だよな。

でも、申し訳ないなんて思わないけどな！

だってこいつ俺様だから悪気はわからない…、いや、でもこの姿ならちょっと申し訳なく感じる…。だってかわいいんだもん。

「と、いうわけで俺様は帰る。ネギまの新刊が出たから読まないといけないという仕事があるんだな。」

と言いつつ神は消えた。そんなのが仕事って…。楽でいいよなあ。

まあいいか。俺は俺なりにチート能力を駆使してネギまの世界を楽しむとしますか！

はじまり 2 (後書き)

神様がネギまの新刊を読みに行くと言っていますが、作者は読む予定はありません(オイ)

なので彼がその知識を作中で使うことはありません。

神様は自由参加なのでいつ話に出てくるか分かりませんね…。

冥沙

原作こんにちは 1

無事に神も消えたわけで。周りは壁で、俺はどこかの物置のようなところにいるようなので、外に出て目印になるものを探してみることにした。

外は普通の家が並んでいた…。でも気のせいか、外国風の家が多いような…。 あらあら、日本じゃないのかしら？

あれれ…。？ 歩いている人たちも金髪ダヨ？ 黒髪黒目の日本人はドコ？

俺はそのへんの人に聞いてみた。

「すいませーん、ここって日本ですか？」

「はあ？ ドイツですけど…。あなた大丈夫ですか？ 病院ならあちらに…」

俺は病院に案内される前に慌ててその場を上手くしのいでその人を振り切った。ギリセーフ。

危ないあぶない。病院なんて連れて行かれたらネギたちに関われなくなっちゃうぜ。

でもなんでドイツなのに日本語が通じるんだ？ しかも相手の言っている意味が分かるし…。

ま、チートだしな！ 気にスナナ！

そうそうチートと言えば…ワープとかねえのかな？ 影とか水を使
ってワープしてたような…。

あったとしても、ドイツから日本はムリか…？ 世界の移動ができ
るぐらいだし、大丈夫だろう！

なぜワープなんてしたいのかだって？ ——俺は飛行機で酔う。
乗り物系にめっさ弱いのだ。

きつと祈ればワープできるはず、

氷でワープしたらかつこよくね？ とか思ったり。

あ、人目のないところに移動したから魔法使っても大丈夫なんだよ
ん。

じゃあさっそく……

転移魔法（氷^{ゲート}ver.）！！

そう思ったら俺の体は氷で覆い尽くされて、そして一瞬でぱりーん
と割れた。

「うわあっ。」

ネギの驚いた声がした。魔法は成功したようだ。ここは教室の前だね。

割れたときはビビッたけど痛くないしそういう魔法みたいだ。

俺が適当に魔法使ったからかな？

「だ、だれですか!？」

そうだ、ネギの相手しないと。

「んにゃ、俺は…名前なんだっけ。」

やっべえ、名前覚えてない…。生前の名前なんてあったっけ。

もやもやして思い出せない。

もーいいや。後でちゃんと決めるとして。

「んー…とりあえずエトラって呼んで★」

「は、はい…。」

「あれ、あなた、さっきからいました…?」

しずな先生だ。この人って魔法知らなかったよね？

見られてたらずい…。でもこんなこと言ってるんだからその瞬間は見ていないんだろう。

「隠れてたんですよ。」

「あらそうなの。ちょっと後ろ向いている間にいたから驚いちゃったわ。」

「それはスイマセン。」

よっしゃ！ 見られてなかったこと確定。いきなりオコジョは勘弁な。

「でもなんで隠れてたの？」

「ネギに会いたくて仕方がなくて…。すこし驚かせてやろうといたずら心で…。」

んなわけねー、と心の中で自分にツツコミをいれる。

「ネギくんがこの学校に来るのは今日が初めてよ？ 今みんなに挨拶しようとしたところだもの。前からの知り合いかしら？」

「……ええ、まあ。」

やっべ。たしかに今俺がネギのこと知ってるっておかしいじゃん。

しかもここって女子校だから男の俺がこんなとこにいたらチョー怪しい…！

「不審者だと思われちゃうから、学園長に会ってきたいと思うわ。場所が分からないだろうからネギくんの挨拶が終わって一段落するまで、ちょっとそこで待っててもらっていい？」

「分かりました。わざわざありがとうございます。」

しずな先生がいい人でよかったあ。これがあの新田先生とかだったらやばかったね。

新田先生がネギの指導教師につくわけないけどね、原作的に。

「……………」

ネギは俺とは初対面なのによく分からない話が進んでいるから首をかしげている。

俺が目で同意しておけ、と必死に伝えたらネギも一瞬戸惑ったようにして、そしてうなずいた。

先ほどのワープで魔法関係者だと分かっているため、この場ではそうした方がいいと考えるくれたみたいだ。しずな先生もいることだしな。

そうして先にネギが教室に入り、あのトラップにひっかかった。どんまい。

初めてこの学校にきた、ということは本当に原作開始と同じくらいだな…。

あの神と話していた時間と、ワープとか言っていた時間で最初の「失恋の相出てますよ」イヴェントはスルーしたわけか。

までよ…。もし「失恋の相出てますよ」のときにワープしてたらいろんな人に魔法バレてたんじゃあ…。

あんなにいっぱい人もいたことだし…。あぶなっ。神には感謝しておこう…。

原作こんにちは 1 (後書き)

ネギアンチのはずが、ネギと仲良くなろうとしてるような…。
まあ気のせいです。

しょーもない後書きですいませんっ。

冥沙

原作こんにちは 2 (前書き)

今回短めです。

原作こんにちは 2

「ふおっふおっ。おぬしは何が目的じゃ？」

俺は今、伝説の後頭部がくえんちようと話している。

しずな先生は俺を連れてきたあと、学園長に席を外してくれと頼まれてこの場にはいない。

「目的って…？ 俺はただネギに会いたかっただけなんですよ…！」

白々しいけどしずな先生のときのように、再びネギの知り合いを演じてみた。

「しずな君もいないんじゃない？ そんなあからさまな嘘を言っておらんて本当のことを言ったらどうじゃ？ おぬしの魔力は多いからのう。魔法関係者なのじゃろう？」

ま、そりゃそうだわさ。ばれるよな。

ん？ 俺って神様に魔力増やして、なんてお願いしてねえぞ？

…あいつがサービスで増やしてくれたんか。多分そうだろ。

いやあ、意外といいやつだな…。確かに魔力がないとちょっとキツイもんな…。

だてに二次元の神やってないってか。ネギまとか何回も読んでるって言ってたしな。

「…俺を麻帆良学園の教師にしてほしい。」

だってその方が原作と関われるじゃん？ 楽しんでいこうぜ。」

かわいい女の子達いっぱい。うれしー。（うわ俺サイテーだあ）

「ほう？」

「警備の仕事もやってもいい。それと俺の住む場所がほしい。」

「よいのだが…わしはおぬしの力がどのようなものなのか、まだよく分かっておらん。魔力や今の様子を見るだけでもかなりの強さなことだけは予想がつくのじゃが…。タカミチ君と戦ってみてはくれんか？ そうすれば他の先生にも示しがつくからのう。」

「別にいいぜ？ いつやるんだ？」

「おぬしをあまり待たせるのは得策ではないような気がするからのう…。今日の夜でどうじゃ？ タカミチ君にはわしから言っておこう。」

「りょーかい。じゃあな。」

そういつて俺は学園長室を出た。

でもよく分かったな…。あんまり待たせるようなら学園長を直接半殺しにして納得させようかと思ってたんだよな。

命拾いしたね、学園長。

麻帆良学園の中をうろつくのも悲しいので（だって不審者扱いだろ？）アルに会いに行こうかと思い、図書館島に行くことにした。

もちろんワープで。

が、図書館島には夕映っちがいた。

というかワープしたら目の前に夕映っちがいたのだ。

それはワープの瞬間を見られたということになるわけで。

うわー、やっちゃまった！　まだこの時点では夕映は魔法のことを知らないはず…。

「え！？　いきなり現れたです！　…ワープ…？」

まあいっか。どうせすぐ知ることになるんだし、俺が教えても平気だろ。

「…。どうやって今現れたのか知りたい？」

「教えてくれるのですか!？」

「うん。聞くよりも体験する方が分かるでしょ。じゃあ俺の手を握っておいて。」

そう言って俺は夕映とさりげなく手をつないだ。

「つないでないとダメなのですか…?」

「ダメなの!」

本当はつないでなくてもいいんだけどね。接触していれば大丈夫だから。

「そ、そうなのですか…。」

「んじゃ行くよ!」

「え、行くなってどこにですか!？ やっぱりワープなのですかー?」

とりあえず…人がいない麻帆良の裏山に転移するか!

楓がいるかもしれないけど…。

転移^{ゲート}魔法(氷ver.)!!

あ、そういえばアル忘れてた。…今度でいいや。

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

ゲート
転移魔法（氷ver.）

氷でワープしたらカッコいいんじゃない？
という作者の考えで作られた魔法。

原作こんにちは 2 (後書き)

というわけで夕映が参加です。

前話で27巻以降読む予定はないとか言ってたんですけど…。

なんだかんだ言ってよんじやいました。

知り合いがころよく貸してくださったので…。

現在作者は295話まで読みましたポヨ。

どんだけ読んだんだよっていう…WW

295話はまだコミックスになっていないようですね。(7/12

現在)

こんな作者ですがよろしくお願いします。

冥沙

原作こんにちは 3

「え……。ここは……？」

「麻帆良の山だよ。図書館島からけっこう遠いでしょ？」

「ということは本当にワープしたのですか！？」

「そうだよ。」

「ワープだなんて……。そんな魔法でもない限りムリではないですか！ どうやったんですか！」

「あるんだよ、魔法。」

「魔法……！ では、あなたはワープ以外にも魔法が使えるのですか？」

「……どうしようか。たぶん使えるけど、まだワープしかやったことないから不安だなあ。」

でも神様に魔法の経験をくれて言ったんだから大丈夫だろ。

「ラウ・ロウ・レッサ・レックウ！ サギタ・マギカ魔法の射手 セリエス・グラフィアリス氷の3矢……！！」

どごーんッ……！！ 木が一本折れた。まあ、気にすんな。

ちゃんと魔法は使えるみたいだ。呪文も覚えてたし。無詠唱もでき

るかもな。

「と、こんな感じだな。」

「す、すごいです！ その魔法というのは誰でも使えるものなのですか？」

「使えるぞ？ 才能や魔力の量は人によって違うけどな。」

夕映って原作ではなんちゃら騎士団？ にも入ってたことだし才能はあると思うけどね。

「ぜひ教えていただきたいです！」

「いいけど俺しばらく魔法を使ってなくてね。俺が思い出すついで一緒に修行なんてどうだ？」

「はいです！ わたしは綾瀬夕映です。あなたのことは何と呼べばよろしいですか？」

「エトラって呼んでくれ。俺は夕映って呼んでもいいか？」

「もちろんです、エトラさん。」

やっぱり最初はさん付けだよな。夕映ってもとからそういうキャラだし。

でもいつか気軽に話せるようになりたいもんだねえ。

魔法の修行と一緒にやってれば普通に仲良くはなれると思うけど

…。

「んー。じゃあ俺明日ぐらいにここの教師になると思うから、すぐにまた会いに行くよ。んで魔法の修行しようぜ。」

「分かりましたです。わたしは2—Aなのでそこに来ればいると思うです。」

「ほーい。じゃあまたな。」

そう言って俺はまたワープしようとしたが夕映に呼び止められた。

「って、待ってください！　わたしはここから帰る道が分からないのですが…。」

忘れてた。そういえば俺がワープで連れてきたんじゃない。

もっかいワープっていても…。また別の人に見つかりそうだし…。

人があんまりいなくて帰り道が分かったころ…ってないよなあ。

んー…。ここは楓に頼むとするか。多分この近くで修行してるはず

だろ、忍者の。

「頼れる人がいるからその人になんとかしてもらってくれ。ワープは見つかっちゃうからな。その人のところまでは俺がつれていくからさ。」

「? こんな山奥に人がいるのですか？」

「まあ行けば分かるさ。」

俺は夕映をお姫様抱っこして楓の気配がするほうまで急いだ。

楓なら優しいし、頼りになるだろ。

「なにをしますっ／＼ 自分で歩けるです！」

「ケガするかもしれないだろ。それにこっちの方が速いし。」

「それもそうかもしれないですが…。」

夕映はまだ何か言いたそうだったが俺は無視して走り続けた。

走りながら夕映に思いついたことを話す。

「俺さ、今夜用事があるからそれ終わったら迎えにいくから、その人のところで待ってて。後日会いにくのめんどいから、その後もうすぐに修行始めちゃうか？」

「わたしはそれでいいです。…それよりもスピード抑えられません

ですか？　こわいです…。」

「ムリ。」

その後は特に会話もなく走っていた。夕映は怖くて声がありませんになったみたいだ。

楓を発見した！

▼ 話しかける
おどろかす
ころす
にげる

いやいや問題があるだろう、この選択肢…。

「ころす」って…まずいまずい。「逃げる」は来た意味ねえし。

ここは普通に話しかけて…。

「すいませーん！」

「…！　何者でござるか！　……夕映殿？」

楓は警戒してクナイを出したようだが、俺にお姫様だっこされている夕映を見てクナイをしまった。

「長瀬さん…？」

夕映も楓がこんなところにいたことにびっくりしたみたいだ。

まあ楓のイメージにはぴったりだけどな。普通は女子中学生が山にいるとは思わないわな。

「ちょっとこの子を一時的に今日だけ預かっててくれないか？」

「…分かったでござる。でもなぜ拙者に頼むのでござるか？」

「俺ってまだ麻帆良学園にいる許可得てないからさ、俺が麻帆良を歩いてると不審者なんだよ。多分今夜許可が出ると思うから、それまで頼めるか？」

「もちろん。クラスメイトでござるからな、夕映殿は。」

夕映本人は俺が速いスピードで走ったあとクラスメイトの楓を見て安心して気絶してしまったようだ。

「本人にもそう伝えておいてくれ。」

「了解したでござる。」

俺は楓に返事をきくとその場から動き、木の陰に隠れてワープを使った。

「もう行ってしまったでござるか……！　速いな……。何者でござるの
 だろうか……。全く分からないでござるな……。夕映殿が起きたら詳し
 い話をうかがうとするでござるか。」

[illegible]

ラウ・ロウ・レッサ・レックウ
作者がなんとなくつけたエトラの始動キ―

原作こんにちは 4

さてと…夕映は無事に楓にあずけられたことだし。

いっちょタカミチとの戦闘の準備でもするかあっ！

修行場所に別荘を使いたいんだよなあ。神に頼んであったからあるはずなんだけど…。

どこにあるのかよく分からねえ…。神に聞くのが楽なんだけどいねえよな？ あいつ。

仕方ないからこのへんでやるか、森だし大丈夫だろ。

まずはハンターハンターの能力から♪ クラピカの念能力やってみたかったんだよな…。

たしかクラピカの束縛^{チェインジェイル}する中指の鎖って触れた相手を強制的に絶の状態にするんだよな…。

ネギまの世界じゃあ念の達人はそんなにいないわけだから、魔法を使われたら大して意味はないよなあ。

だったら強制的に気と魔力が0^{ゼロ}になる、に変更すりゃいいんじゃない？

おお、名案だぜ！ そうしょ！

「束縛する中指の鎖!!」
チエーンジエイル

……俺に巻きついた。いやいやいや、自分にやってどうすんだよー
(涙)

魔力が0になってるのが自分でも分かった。(気も)

まあそれが確かめられたからいっか…。

それにしても俺はノーコンなのか…？ 木に巻きつけようとしたのに…。

ノーコンはなんとかするとして、俺って魔力が多いって学園長が言っていたとおり、無くなると大きい喪失感がある。

そうだ！ これから魔力をカモフラージュしたくなったときにはを
チエーンジエイル
束縛する中指の鎖を自分にやればいいんだよな。 おお、便利だ！

まあ身動きはとれるように左腕に軽くかっこよく巻きつけりゃいい
だろー。

他にも魔法やってみたいな…。 防御系とか。 ためしにエヴァみたいな
な技をやってみるか。

レフレクシオー
「氷楯!!」

普通に氷の盾でした。なんか怖い魔法から守れそうですね。

とかなんやらやっているうちにもう夜になっていた。

そういえばタカミチと戦闘をやる場所聞かなかったな…。気配は…
遠すぎて分かんないやつ。

じゃあここは…

「導く薬指の鎖！！」
ダウジングチェーン

その向きは…自分。

なんじゃこりゃー！ ノーコンにもほどがあるっちゅーねん…。

「標的指定・タカミチ 導く薬指の鎖！！」
ターゲット・オン ダウジングチェーン

おお！ 成功した！ 北の方に向いているから、そっちに行けばいいだろ。

ターゲット・オン
今度から標的指定して難しい魔法をやることにしよう…。悲しいけど。

そうやって適当にタカミチを探していたら奇跡的に見つかった。

「おお！ タカミチ！」

「よくたどり着きましたね…。」

「どこぞのアニメみたいなセリフ言ってんじゃねえよ…。お前が俺とたたかうんだよね？」

「そうだよ、学園長から話は聞いてるからね。じゃあ…いくよ。」

と、タカミチが攻撃を仕掛けてこようとしたけど、その前に

「束縛する中指の鎖！！」
チエーンジエイル

「な、なんだ…鎖！？」

先手必勝〜！ タカミチには咸卦法がつかえなくなったな。

この鎖に縛られると気も魔力も0ゼロだからね。

「標的指定・タカミチ」
ターゲット・オン

「ラウ・ロウ・レッサ・レックウ！ 魔法の射手 氷の3矢」
サギタ・マギカ セリエス・グラキアーリス

身動きのとれないタカミチはもろにそれをくらったようだ。

普段なら魔力や気で無意識にある程度のダメージは軽減されるのだが、今のタカミチにはそれがない。

かなりの痛手を負ったようだ。苦しそうww

俺が追い討ちをかけちゃおうっかな〜とか思っていたら

「そこまでじゃ！ おぬしの実力は十分分かったぞい。タカミチ君を一瞬で負かすとはたいしたものじゃ！ 正式に教員兼警備員として雇うことにしたわい。」

どこから見えていたのか、後頭部がくえんちようが慌てたように俺の採用をOKした。

いくらなんでも、まさかタカミチを圧勝するとは思わないで余裕こいてたんだろ。

俺はタカミチを縛っていた鎖を元に戻した。ちなみに俺の左手はクラピカみたいに鎖がついている。

さっき初めてクラピカの鎖能力を使ってからだ。原作のクラピカと同じ理由もあるが、それよりもカッコイイからわざとその状態のままにしているのさ☆

「そーか。それはよかった。要望があるんだが、担当は2年A組、ネギと同じクラスの副担任補助にしてくれ。」

自分で言うっておいてあれなんだが、副担任補助って絶対いらないよな、そんなもん。

副担任自体が担任補助みたいな部分もあるからな。

「ふむふむ。いいじやろう。教科はどうするのじゃ？」

「ドイツ語」

「そんなの中学にはないじゃろ」

むう…。じじいにツツコミされる日が来るとはな…。

俺はなぜだかドイツ語ができるみたいだからそれが良かったんだが…。

「じゃあ（社会はムリだ…この世界の地理と歴史には弱い）日本語でいいか？」

「たしかにのう…。2－Aは留学生も多いことだしおねがいしようかの。」

「じゃあ住む土地をくれるっていう話は？」

「山に開けた場所があるのじゃ。そこを自由に使ってくれてかまわんよ。」

「さんきゅ」

「これぐらいなんともないから大丈夫だぞい。（こやつは強すぎるから危険じゃ…まだ人間性もよく分かっておらんからできるだけ生徒から遠いところに住ませた方がいい…。だが粗雑な扱いをする」と怒らせる可能性もあるからのう。これぐらいが妥当じゃろう。）」

学園長のこころの声が聞こえてきたぜ！　まあ何を考えてようがいけどな。

原作こんにちは 4 (後書き)

今回の話を書いていて、Angel Beatsもチート能力の中に入れたいなあと思いました。もしかしたら入るかもしれませんが、ああ作者入れたんだなあ…と、温かい目で見てやってください…。

冥沙

原作こんにちは 5

「ところでおぬし、名前はなんというのじゃ？」

「…エトラって呼んでくれ。」

そろそろ名前考えないといけないな…。もうエトラだけでいいか。

そうだ！
パクティオー
仮契約すればカードに名前が入るじゃん。真名発覚！
てな。

よし、さっそくネギと…。って、あかんあかん、そりやまずい…。
いろいろと…。

「エトラ？ 聞いたことがないのう。そんなに強いのに無名とはな
んでじゃ？」

「最近まで隠れてたし。大体俺は18歳だぜ？ そんな有名になる
ほど生きてないさ。」

「そういうものなのかのう。」

学園長はびみょうに納得がいていないようだった。でもうやむや
にできたからまあOKさ！

ところで、

タカミチ大丈夫ですか？

そろそろ死んでもおかしくないんじゃない？ タカミチの方を見ると案の定死ぬ寸前だった。

あんな初歩魔法でも無意識のガードがないとヤバいんだな…。そこまですごいと思わなかった。

俺はタカミチに近づいた。それを見て初めてタカミチがヤバいことに学園長も気付いたようだ。

学園長もまさかそんな初歩魔法で死にそうになるとは思っていなかったんだろう。

「…タカミチ君大丈夫かの！？」

幸い体の一部分がなくなっている、なんてことはなかったのでクラピカの技をまた使う。

今度は回復の効果のある技だ。

「ターゲット・オン 標的指定・タカミチ ホーリーチエーン 癒す親指の鎖！！」

なんか俺タカミチばかりターゲット・オン 標的指定してる気がするわ…。

そして、俺の親指につながる鎖がタカミチをミイラのようにぐるぐる巻きにした。

それを見た学園長ようかいがぎょつとして俺に視線を移した。

「エトラ君！ これ以上はタカミチ君が…！」

「だいじょーぶ。これは回復を促す効果のある鎖ですから。」

俺はそう言って十秒間その状態を保った。俺の前には、ずっと不気味な鎖のミイラがあった。（ひでえ

「もう大丈夫です。」

俺が鎖を自分の左手に戻し、タカミチはミイラから解放された。

「あれ？ 痛くない？ 治ってる…！」

タカミチが一人で驚いたり騒いだりしている。

「それにしても珍しい魔法じゃのう。鎖とは…。」

「はい、便利ですよ（なにセクラピカ様の技ですからね！）」

「では俺は待たせている人がいるので…ここらで失礼しますね。」

「ほんな来週から仕事を頼むぞい。ペアはタカミチ君じゃからよろしくのう。」

後ろでタカミチが、あんなに強い人と…！？ ムリです…！ とか言っていたようにタカミチは次の警備の仕事で俺にころされたいみたいだね、うん。

そうして俺はまた導く薬指の鎖を使おうとして…。

アレ？ ワープすればいいんじゃない？ と思い至った。

でもあまり近距離でワープを使う人はいないっぽいし…。楓が夕映のそばにいるだろうしな…。

まあとりあえずワープは使わなくていいや。

「ターゲット・オン 標的指定・夕映 ダウジングチェーン 導く薬指の鎖！！」

あ、初めてタカミチじゃない人をターゲット・オン 標的指定した。

俺は鎖の指し示す方向に向かって歩き出した。え？ 道を覚えてないのかって？

覚えてるわけ無いじゃん、だって俺はそのときそのときで適当に生きてますから！

夕映見つけた。楓といっしょだ。

「やあやあお二人、元気にしてたかい？」

「なにごともなく済んだでござる。ところでエトラ殿、変な口調でござるな？」

「あなたものです、楓。」

楓の発言に即座に夕映がツツコむ。でもさあ夕映だってねえ…？

「うーん…。全員じゃない？」

俺の言葉に二人は黙ってしまった。

（たしかにそうでござる…）

（エトラさんの言うとおりかもしれないのです）

（でもこの中なら俺の口調が一番フツウだろう）

自分で言っておいて一人だけ違うことを考えているなんて思いもしないエトラであった。（ちびまるこ風）

「楓、ありがとな。いきなりお願いしちゃったんだけど頼まれてく
れて。」

「そのぐらいなんてことないでござる。エトラ殿や夕映殿ならいつ
でもよいでござるよ。」

「おー、さんきゅうな。：俺さあ、楓に名前教えたっけ？」

「夕映殿に聞いたでござる。エトラ殿はなぜ知っているでござるか
？」

「：俺これから2－Aを担当する教師になるんだ。生徒の名前を知
ってるのは当然だよ。」

「：そういうことにしておくでござるよ。（なんで山にいらると分か
っていたのか謎でござる）」

そうして楓とは分かれて、俺は夕映といっしょに山のひらいた土地、
というのを探していた。

あ。これこそダウジングだよな。どこなのか分かってないからワープ使えないし。

「ダウジングチェーン導く薬指の鎖!!」

具体的な名称は無いから、標的指定は使えない。

でも心の中で念じていれば多分大丈夫。ノーコンでも。

けっこうすぐに見つかった。

俺はその場所の陰になっていて見つかりにくい場所に別荘を置いた。そう別荘を…って!

なんであんのさ? さっきはなかったのに…。

「そんなの俺様がおまえに渡したからに決まっているだろう、エトラ。」

え、神!? なんで? 仕事じゃなかったの?

「新刊読むのにそんなに時間なんてかかるわけがないだろう。」

たしかに。

「神さまって名前ないの? いちいち神って言いたくないんだけど。」

原作にも神いるし。」

「ない。」

「即答かよ!?!? じゃあ考えておくから今度言うよ。」

／＼／

「照れるなてれるな。きもいゝっ!!」

俺がキモがっている間に夕映は神がいることにやっと気付いたよう
だ。

俺のこころをよんで、ほとんど神様が一方的にしゃべってたからな、
気付かないのもむりはない。

「これかわいいです! エトラさん、この動くお人形さん何なん
ですか?」

夕映…。やっぱりかわいいよな! 俺は同士がいてくれて嬉しいよ!

「動く人形じゃねえよ。俺様はこの世界の神だ…!」

「ええっ! ライト月ですか、あなたは!?!」

夕映は俺様な神にびっくりしているようだ。…でもなんで夕映は月
知ってんのさ。ライト

「夕映、なんで知ってんの!？」

「図書館探検部なめないで下さい。あそこにはいろんな本があるので
す!」

おそろべし…図書館島……!

— — — — —
— — — — —
— — — — —

＊＊H×Hのクラピカ的能力＊＊

ホーリーチエーン
癒す親指の鎖

鎖を巻きつけた部分のケガを治す。

原作こんにちは 5 (後書き)

感想まっています。

こんな文章ですが…作者にどうかコメントを。

冥沙

原作こんにちは 6

なんだかんだいって俺は住む家がないので神にお願いした。

名前をくれるお礼だと言っていたのでまあいっか。そんなに嬉しかったのかなあ？

やっぱ俺もネギと仮契^{バクテ...}…モゴモゴ。

神は一瞬でいいかんじの家を作り上げた。絶対俺よりもこいつの方がチートだよな！

「大丈夫だぜ、俺は干渉しねえからチートでも意味ねえ。」

ということらしい。既に干渉している気がするんだけど…？

まあ助かるからいいんだけどね♪

「家は俺様が作ってやったが結界は自分ではれよ？」

「おう分かってるさ。」

そう言って俺は家の周りに人除けと防御の結界をはった。

その頃夕映は、

「こんなすぐに家ができるなんて…魔法って…。」

とか呟きながら軽く放心状態だった。でもスマン。これは魔法じゃなくて神のチートだ。

「あのさあ、お前を呼びたいときに呼べるようにできないかな…。」

「なんでだ？」

神は首をかしげている。ミニチュア ver. でそんなことされると、かあいい！ お持ち帰り〜！ したくなっちゃうぜ。

「いると便利だし。いろいろと。」

「さすが俺様だな！」

「神様なのに便利扱いされてていいのですか…。」

夕映が苦笑いしているが、神は便利扱いされていることには目が向かなかったようだ。バカで助かる。

「ん〜、たしかさあ、クラピカの人差し指の鎖の能力って、原作でもまだ分かってないんだよね？」

「ああ、そうだ。」

「じゃあ勝手に俺が決めちゃっていい？」

「いいぜ。好きにすれば？　ただし今俺に言ってくんないとダメだけど。なんにするんだ？」

「神レッサコールチエーンを呼ぶ人差し指の鎖、いつでもお前を連れてくることができる。ちなみにお前の名前レッサで決定な。」

理由は、おれさま↓れさ↓レッサ　だ。なんとも失礼な理由だがそんなこと知っているわけもないのでぐっじょぶさ。

「ふーん…、お前にしては　まあまあな名前じゃねえか。…能力の方は仕方ねえな、OKだ。」

とか言いつつ神レッサは名前をきいて嬉しそうだ。

「俺はまた用があるから帰る。よろしくな。」

そう言ってさっと消えてしまった。

「レッサさん、さようならです…。」

夕映の言葉は神が消えた後に空しく響いた。どんまい、ちょっと夕イミングが遅かったな。

俺は土地の陰に置いてあった別荘セットを家の中に移動させた。

教師兼警備員の仕事もまだ始まってないし、別荘に入っても大丈夫だろ。

「夕映。これは別荘ってな、中が不思議な空間になってるんだよ。戻ってきたとき、この中にいた時間と、現実で経過した時間はズレが生じるんだ。」

「不思議な空間…。時間がちがう…。本当になんでもありですね。」

「まあな。夕映も魔法の練習すればどんどんできるようになるさ。」

「…どんどこですか…。早くできるようになるです！ そのために魔法の練習、精一杯がんばるです…！」

夕映は一日三時間魔法の練習してたって原作で言ってたから、別荘を使ったら練習時間はかなり確保できるようになるから、すごい魔法使いになるかもしれないなあ。

でも正義の魔法使いを目指してもらわなくてもいいけどね。ホラ、ガンドルフィーニとかね…。ああいうのにはなってほしくない。

途中で良い人？ みたいな描写があったけど、結局やったことは変わらないからね。

夕映はその点、妄信してないし、考えもしっかりしてるから大丈夫だね。純粹なやる気もあるし。

「気合い入ってるね。俺もがんばらないとな…。でも夕映、勉

強の方も…。」

夕映ってバカレンジャーのリーダーだったよね。副担任補佐（笑）
としてはなんとしてでも良い点をとってほしいんだけど…。

「…………聞こえないです。」

魔法の練習やろうとしてんのに勉強なんて言っちゃだめだった。
テンション下がっちゃうよね…。なかったことにしよう。夕映もそのつもりみたいだし…w

「…うん。なんでもないや…俺なんも言ってないよ。…魔法がんばれよ!」

「そうですよね!」

「じゃあ夕映。この中は現実での一時間が一日になる。行くか?」

「もちろんです!」

夕映は俺の話を聞いてテンションが上がっているようだ。俺も初めてだからテンション上がってるけどね! わくわく。

「じゃあ行つくぞ!」

俺たちは意気込んで別荘への結界の上に立った。

「うわあ、ここは…。」

「ただの平野だな。」

…ごめん夕映。自分のイメージしたものを念じなきゃいけなかったんだった。

エヴァみたいな城にしよう。やっぱり別荘だしな！

とりあえず連呼して念じてみる。

— — — — — 城、城、しろ…

「うわっ。城があらわれたです！」

夕映は驚いている。なんとか成功して良かったぜ。

「城の中入るぞ。」

そう言って俺が一步を踏み出したとたん。ばきっ。床が抜けた！？

「うわあ〜ッ！」

落ちてゆく

「念糸^{ねんし}!!」

慌ててマチの技を使って手すりに糸をとばして巻きつけた。それを使って地面へと戻る。セーフ。

自分の念の形を糸にして操れるのはいいねえ。マチさまバンザイ!

「:びっくりしたです。」

ゴメンナサイ。もうこんなことが無いようにきちんとイメージし直しますっ。

————エヴァの別荘:城:エヴァの別荘、
城:丈夫:。

「ほら、もう大丈夫! 行こう!」

「はいです!」

俺たちは魔法の練習ができる広いところまで移動した。

そして、俺は左腕を通常曲がらない方向へとぼきっと曲げた。

「何をしているんですか!？」

夕映が顔を真っ青にして俺に近づいてきた。

「ん…。さすがにちょっと痛いな…。癒す親指の鎖!!」
ホーリーチェーン

鎖が俺の左腕に巻きついた。

「どの程度のケガをどんくらいで治せるのか気になってね。あと標^タ的^{ゲット・オン}指定しなくても能力や魔法が使えなきゃ戦闘で不利だからね、その練習をしようと思ってさ。」

「…。もっと安全な方法をとってほしかったです。」

「めんどメンゴ。次からは言ってからやるからさ。」

「むしろ、できればやってほしくないのですが…。」

「やらないと試せないじゃん? ま、すぐに治るんだし? ☆」

「…まあ、エトラさんがいいというならいいです。」

ん? 夕映と話している間に完治したみたいだ。大体20秒ぐらいだな。まあそんなもんだろ。

神レッサコールチェーンを呼ぶ人差し指の鎖

レッサをつかまえて連れてくることができる。

＊＊H×Hのマチの能力＊＊

念糸ねんし

自分の念を糸に変化させて使える。

原作こんにちは 6 (後書き)

ちなみに神^{レッサコールチェーン}を呼ぶ人差し指の鎖は主のオリジナル能力としては数えてません。クラピカの能力のついで、というかんじに考えてください。

冥沙

原作こんにちは 7

俺たちは魔法（俺はH×Hの能力もだが）の練習を終えて疲れ果ててぐだっとなっていた。

「疲れた〜。オフロ〜。」

「お腹も空いたです…。」

エヴァの別荘みたいに管理してくれる茶々丸姉ロボットたちがいないから、ご飯もないしフロもわいてない。それような施設はあるんだけどね…。

あ〜…フロ入りたいなあ…。24時間たつまで出られないんだよ〜。
いっそその辺の海にだいぶしゃちゃおっかなあ。

…そうだ、こんなときこそ、チート神ことレッサに頼めばいいんじゃないん！

よっし、そうと決まれば〜…！

「夕映、今からレッサ呼んで頼むからな〜。」

前もって言うっておかないと夕映に怒られるからな…。

「ホントですか！ よろしくですー。」

「^{レッサコールチェーン}神を呼ぶ人差し指の鎖!」

俺の人差し指の鎖が天までどんどん伸びてゆく。レッサのいるところまで伸びていつて捕まえてきてくれる優れモノだ。別荘の中でも使用可能なもようだ。

しばらくしてレッサが鎖につながって降りてきた。

「なんのようだ? ついさっきぶりなんだが…。」

「ちょっとこの別荘じゃ不便だからさ、エヴァみたいに便利にしてくれない?」

「抽象的すぎてやりづらいんだが…。世話ロボとか服とか食料、魔法の巻物を用意すればいいのか?」

「そうそう! お願い!」

「ついでになんなんだが、お前も夕映も魔法を使うときに杖を使っていないようだな…。効率とか成功度が落ちだぞ? お前はチート補正である程度大丈夫だが、夕映はこの特殊な別荘から出たら多分使えないと思うぜ。」

「あ、忘れてた。」

そういえば杖とか使ってたよなあ…。すっかり頭から抜け落ちてたぜ。

どーりで夕映が魔法初めてできたのが遅かったわけだ…。俺もノーコンだし…。

「じゃあ指輪2つちょうだい。」

「やだ。俺様はひとつしかやらん。夕映は、エトラが自分で用意してくれたものを貰ったほうが嬉しいだろ？ 特別にハンターハンターのコルトピの能力をやるからそれで複製しやがれ。」

「まじで！ 能力くれんならその方が良いや。でもコルトピの能力で複製したものって一晩で消えちゃうんでしょ…。意味なくねえー？」

「そこはなんとかしとく。ほいつ。」

うわっと。レッサの投げってきた指輪をキャッチする。落としたらどーすんだよな…。

「じゃあな。もうしばらく呼ぶんじゃねえぞ！」

そう言ってレッサは天に戻っていった。しばらくってどれくらいかな…？

残念だけど俺の都合でどんどん呼んじゃうから覚悟しとけよ、レッサ！

ギャラリーフェイク
「神の左手 悪魔の右手!!」

俺はレッサからもらった杖代わりの指輪をコピーして夕映に渡す。

「それいつもつけといて。」

「分かりましたです。左手の薬指ですね。」

「そうそう、俺も…って、違うわ! フツウに違うところにつけなさい!」

俺の言葉に、夕映は仕方ないですね…と言いながら指輪をほかの指につけた。もちろん俺も。

さっきレッサは何かをしたそぶりは無かったけれど、俺の頼みをきいてくれたんだしきつと別荘はエヴァのようになってるはず。一刻も早くフロに入りたいのじゃ!

「じゃあ俺はフロ入ってくるから、夕映は先に飯食ってていいぜ。」

「そうしますです。のぞきはしないんで安心してくださいです。」

「…………ああ。」

「…なんですか、その間は!」

指輪の件からしてありえんことではないような気がしてきた…。まあ原作の夕映はそんなキャラじゃないし大丈夫だろうとは思うけど。

んーと、フロフロ。城の中を適当に見渡しながら探し回る。

温泉マークのついたのれんがあるからあそこかな？ あれ？ エヴ
アの城のお風呂って温泉じゃなかったよね…？

まあいつか。とりあえず風呂入りたいし。男湯だと思われる方のれんをくぐる。

「うわっ…！」

びびった…。中にはロボがいた。レッサに頼んだ世話ロボかな？
やっぱりレッサは頼んだことをやってくれていたみたいだ。

「お風呂ですね。着替えをお手伝いいたします。」

これは定番のアレだ！ 金持ち文化（金持ちというかなんか別の次元？ の文化）じゃないか！

「いいって、いいって！」

「？　そうですか。ではこちらで待機しています。」

「待機してなくてもいいよ、俺も着替えたいし…。」

「では入浴のお手伝いはしなくてよろしいのでしょうか？」

「大丈夫。俺は、某少年魔法使いとは違って烏の行水じゃないから。」

ネギって、頭洗うの嫌なんだよね…。目に入るの痛いとかそんなところかな。

確かに子供の頃に一回は目に入れた思い出があるよね…。……え？俺だけ？

なんとかロボさんを追い払って俺は風呂場に入った。

頭を洗おうと思ってシャワーの前に座ったのはいいんだけど…。

あれ、鏡にうつってるこの人見覚えありますね…。だれですかね…。

…って俺！？こんなにカッコよくなかったよ、俺！

すげえ、美化されてる…。まあ前の世界でもラブレターは何回か貰いましたけど？（うざっ

驚くのもほどほどにして…。浴槽に足を入れる。丁度いい温度だぜ！

その後、浴槽にひたってゆ〜ったりした。今日の特訓の疲れを癒すぞー。

「あゝ。いいフロだったー。夕映も入れば？」

俺は風呂から出て、ほくほくと夕映を探していた。ちなみに夕映にはのぞきはされなかった。

そのままたらたら歩きながら夕映を探していると、お腹減ったと言っていたとおりテーブルでご飯を食べているのを見つけた。

「あ、エトラさん。ここのご飯すごくおいしいです、最高です！」

めっちゃ豪華な料理がいくつか夕映の前に並べられていた。

空の皿もあるからそれは夕映が食べたのだろう。

それにしても：すごい量だな。よく食えたね：。

「夕映って食いしん坊だったけ？」

「なっ！ 違います！ 魔法の練習を何も食べずに一日やれば、これぐらいお腹は空くです！」

めんどくさくて昼ごはんナシで一日ずっと練習してたんだった。

俺が何本か持ち込んでおいたから、夕映も俺も飲み物はちゃんと飲んだけど。

夕映用にトマト・オレも持ってきたらめっちゃ喜んだ。おいしいのかな…あれ。今度飲んでみよう。

で、明日からはちゃんと昼ごはんをとったほうがいいかな…。そのほうが効率良さそうだ。

「それもそっか。俺もけっこう腹減ってるしなあ。途中からだけと一緒に食うか。」

「エトラさんもいっぱい食べそうですね。あつ、すみません、リースさん追加お願いするです。」

夕映は近くにいたロボを呼び止めて食事の追加をお願いしたみたいだ。

たしかに俺も食うとなると、これじゃあ足りないかもしれないな…。

「夕映、ロボに名前つけたんだ？」

「はいです。この人は主にわたしのお世話担当のようなので名前をつけたです。」

「ふん…。リースかあ…。センスいいじゃん。」

「そう言っていただけだと嬉しいです。」

夕映は照れくさそうにニコツと笑った。やべえ、かわいいっす。

俺は夕映の顔から目を外して外の景色を眺めた。だって夕映かわいくて見てられないんだもん！

[illegible]

ギャラリーフエイク
神の左手 悪魔の右手

H×Hコルトピの能力。左手で物を記憶し右手でコピーを作れる。

原作こんにちは 8

そういえばレッサのことをちゃんと夕映に話してないなあ…。

レッサ本人は神だって言ってたけど、夕映が信じてるわけないし…。
俺の魔法の一種とか思ってるかも。

追加のご飯ができるまでまだ時間あると思うから言っておくか。

「なあ夕映。レッサって本当に神様で、俺の魔法じゃないからね。」

「へ？ 神様…ですか？ …存在するのですか？」

「まあ、あのチート能力を見れば…な。分かるだろう？」

「わたしは魔法も十分チートだと思うですが…。」

たしかに夕映はまだろくに魔法も知らないもんな。ついさっき知ったばかりだし。

チートがどこらへんからなのかよく分かんないよな…。

「それもそうなんだけどな。神と知り合いなのはおそらくこの世界で俺だけだぜ？」

「…すごいですね。なぜ知り合いになったのですか？」

「…まあ、そこは、な。気にすんな☆」

「……………。（しらー）」

ひどいよゝ夕映ー。でもいきさつ語ったら本格的に俺って電波になっっちゃうじゃん…。

だって、異世界から来ましたゝ、ここはマンガの中の世界で俺は未来を知ってるんだ、とか完全に頭いっちゃってる…。

既に魔法とか神とか変なことばかり言ってるのにそれはさすがにまずい…。

ここは仕方ない！ 話をそらしてしまええ！

「まあレッススのことはおいといて！ ご飯もきたし食うぞ食うぞ！」

夕映が、自分から言い出したのではないですか…とか言ってるのが聞こえたのは幻聴だよね！

その後は、あまりにおいしい料理に二人で感動しつつ、しばらくして食べ終えた。

俺はフロに入ったあとは、とりあえずタオル生地ゆるゝい服を着ていたのだけれど、寝るときはこのままはやだなあ。タオル生地じ

や暑いし。

寝巻きとかもきつとあるだろう、神の能力なんだから。

とりあえずロボに言ってみれば持つてきてくれるよね。

「ソルト」。寝巻きってある？」

夕映は自分専用ロボにリースと名付けていたので、対抗して俺もソルトと名付けてみた。意味は塩。

特に理由はない。語呂いいしカッコよくね？　っていうノリで。

さっきソルトっていう名前を伝えたら淡々と、分かりましたって言われたからちよいへこんだけど、考えてみればつくりたて（？）のロボだし感情はそんなにないか。

「只今お持ちいたします。」

五分ぐらいたってからソルトが戻ってきた。

「こちらでよろしいでしょうか。」

相変わらず無表情で淡々と話すんだよね。

とかそんなことを思っていた俺はソルトの手にある服を見てびっく

りした。

「え！？　なにそのかわいらしい寝巻き！　夕映と間違えてない？」

「いえ、合っています。レッサ様がエトラ様の寝巻きはコレとの要望です。あと伝言ですが、すべては俺の趣味だ、だそうです。」

趣味…！？　いやいや夕映に着せろよ…。こんなん似合うわけないじゃん。うわハズツ。

「…他にはないの？」

「ロックがかかっています。条件を満たさないと解除されないようです。」

「……着るしかない？」

「わたしの服と交換してもよろしいですが。」

それ逆効果！　さすがにそんなの着たらブーイングの嵐だよ。――だって女物はさすがにねえ…？

しかもソルトって、こってこてのメイド服着てるよね！？　分かっててわざと言ってますか…（泣

「…分かった。その寝巻き、着るよ。」

「了解しました。ではわたしは失礼いたします。」

さっきお風呂場で着替えを手伝うと言われて、断ったので今回は自分から出て行ってくれたみたいだ。

いやあ、ソルトは優秀だな。一回言ったことをもう学習してるなんてなあ。

お父さん嬉しいよー。あ、この場合のお父さんは正確にはレッサか？

レッサが神のチート能力で作ったんだもんな……。くっそ、あいっう！ 俺のポジションを！

「……。」

例のあの服に着替えた後に鏡見たんだけどね。俺ってネギまの世界にきてカッコよくなってたじゃん？

そのおかげもあって意外と普通に似合ってた。そんな服似合っても……。エトラ、今の心境は複雑です。

でもやっぱり俺は男っぽいので、もらった服もよく見たらそんなにメルヘンではなかった。

軽くかわいい男物の服って感じ。そこはレッサも考えてくれたみたいだ。

というか考えてなかったらすぐにでも神を呼ぶ人差し指の鎖使って

レッサコールチェイン

レッサ呼んでぶっころしてるけど。

「ソルトー！　ちなみに明日の服はどんなん？」

外にいるソルトに大声を出して聞く。明日もこんなだったと思うところないぜ…。

「着物をイメージした服だそうです。男物です。」

着物をイメージ…？　ナゾい…。

今日よりはまともそうだけど、そんなよく分かんないの着んのやだなー。

「それもレッサ様の趣味だそうです。」

レッサ…。おまえはなんなんだ…なにがしたいんじゃない。

もう今日は夕映とは会わないで、寝るか。

眠いし、今日はもう疲れてるから修行なんてしたくないからねー。

まだ現実では一時間しかたってないだろうから、あと三日ぐらいはここにいれるかな？

そういえば夕映って寮で生活だね。門限とかないのかなあ。

もしあったらそれまでには帰さないといけないよね。

明日会ったら夕映に聞いてみよう。

「おやすみ、ソルト。」

「おやすみなさい。エトラ様。わたしは隣の部屋にいますので。」

「んー。りょーかい。」

ソルトは足音をたてずに部屋の前から移動していった。すごいなあ。

んじゃあ、おやすみ。また明日…。

原作こんにちは 9

「エトラ様、朝です。」

「起きてください。」

「夕映様がお待ちになってますよ。」

こんにちは、私はソルトだよ。夕映様ではなく私視点でごめんね！

今エトラを起こしてるところ。

「うっせーよ遊佐。俺はまだ寝る」

口調悪ッ！ 二重人格じゃん！ 寝起きわ性格変わります、的なの？

しかも誰だよ遊佐って。私はソルトだよ。

「ソルトです。いい加減起きてください。」

夕映ちゃんがお腹ならしてるよ。

もうこいつ面倒くさいから蹴っ飛ばして起こそうかな。

「けりますよ。」

「あ？ ざけんな」

そう言ってエトラはまた寝る！ 手を煩わせないでほしいよ。

「では失礼します。」

キックをいれてやった。

失神

てへ☆ やりすぎちゃった

仕方ないから気失ってる間に着替えさせちゃおうっと。

ぬがせぬがせ

うわあ、エトラってスタイルいいねえ、うひょひょ……ゴホンッ。

え？ 変態？ なんのことかなaaa！

今日の服は昨日エトラに言ったとおり着物をイメージしてるやつ。

私これ好きなんだよね。

倉庫にある服はレッサ（神のことです）の趣味もだけど、服選んでるのは私だよ！

秘密だからね。誰かに言ったら…。…。

立ってないとやりづらいから天井からエトラをつる下げる。

痛そう？ そんなこと気にしちゃだめだよ。

暗い色の着物っぽい服。カッコワイイなあ。

はやく夕映ちゃんに見せてあげたいな！

あ、やべ。つる下げるとき首でつるしちゃった。

死ぬかな♪

って、ぬわっ。バタバタしだしたよ！

危ないなあ！ 意識はまだないのに。…死ぬ直前？

ぎゃああ、やばいいいい。首吊りって後の処理が大変なんだよ！

急いでエトラをとりはずす。

いてっ。エトラに蹴られた。暴れすぎだよこいつ（当たり前です

んー、なんか大丈夫そうだね！

ちょっとあごらへんの骨折れてる気がするけど気のせいだね！

こいつの回復力ハンパ無いから！　ね。

まだ起きないのでエトラをお姫様抱っこしてテーブルまでつれていく。

そろそろ夕映ちゃんが怒り出すから。

――――その頃(No side)――――

「ちょっとリリース。エトラはまだですか！　お腹空いたです！」

「まだです。」

本当だった。

— — e t o r a s i d e — — — — —

…ん？

ん？

あれ？

ココはドコ？

なんで俺お姫様抱っこされてんのー？

めっちゃハズいんですけど…。

「もしもしソルトさーん？」

「はい何でしょうか。」

「何って…。この状況はナンデスカ？」

「エトラ様がなかなかお起きにならないので失礼を承知して運ばせていただいています。」

ふーん…。って、俺着物っぱいの着てるよね？

「ソルトが着替えさせてくれたの？」

「はい。」

え…。マジッスか…。

ま、いっか。夕映とちがってソルトなら変態なことないだらうし。
え、何？ 夕映だってそんなことはない？ ……俺もそう信じたい
よ…。

「ありがとーな。」

「いえ、それが私の仕事ですので」

ソルトって本当に表情変わんないよねー。

何考えてるんだろう？

ロボだから何も考えてないのかな？

でも茶々丸もいるしなあ。でもやっぱり冷静な人なんだろうね。

「首治りましたね…」

「ん？ なんか言った？」

「いえ」

ソルトが小声で何か言っただけだけど聞き取れなかった。

本人が別にいいならいいけど気になるなあ…？

ていうか腹へった。メシー。

原作こんにちは 9 (後書き)

間が空いてしまってますいけません…。

今年受験でして… (笑)

いやー、これ書いてることバレたら塾にころされますね W
宿題さっぱり終わってないですから。

まあ、自分のペースでがんばりますね。

で、今回のソルトですが、思いつきエトラだまされてますね。
ソルトは二重人格とかじゃなくて、エトラの前だと猫かぶってます。
一応主人ですからね。

エトラさんだよ 1

エトラ (仮)

性別 .. 男

年齢 .. 18歳

身長 .. 180cm

見た目..黒髪で濃い緑の目。思わず振り返っちゃうぐらいにはかっこいい。

生前は黒髪黒目の日本人で、高校二年生剣道部所属。身長168cmだった。

今ほどではないけどかっこよかった。

見た目を変えたのはあの俺様神様の趣味だとか。

神様は黒髪が好きだからそこは変えなかったみたい。

神様の趣味で途中から着物を着て行動することに。(男

物です)

性格 ..ふざけることが多い。基本自分が楽しいことをするだけ。

見知らぬだれかのために動くのはめんどくさがる。

人によってキャラを変えることも多い。

一一一H×Hの能力一一一

「★」のついている部分がオリジナル

シズク

デメちゃん↓掃除機でものをいくらでも吸い取れる。最後に吸い取ったものは取り出すことができる。

吸い込んだものがどこにいつているのかは不明。

ただしエトラが生きていると認識しているものは吸い取れない。

シャルナーク

フラックボイス

携帯する他人の運命↓アンテナをつけた相手を携帯で操作できる。

+

★エトラはどうせ魔法世界に來たのなら：という理由でかっこいい魔法具を使って操作している。エトラは魔法で標的ターゲット・オン指定すればアンテナを相手につけなくてもOK

マチ

ねんし

念糸↓念を糸にして扱う。腕がちぎれたら正確に繋げることができる。また武器としてつかうことも可能。自分の手元にある場合かなりの強度がある。糸の強度は糸の長さとは反比例する。

コルトピ

ギャラリーフエイク

神の左手 悪魔の右手↓左手で物を記憶し右手でコピーを作れる能力。

★コピーしたものは一晩では消えず、エトラの意味で自由に消すことができる。

クラピカ

チエーンジエイル

束縛する中指の鎖↓鎖を使って相手を縛ったり攻撃したりできる。

鎖は不可視にすることも可能。

+

★これで縛られると魔力＋気が強制的に0の状態になる（その間だけ）。（原作では強制的に絶の状態になる設定ですがエトラはネギまの人にはそんなに使えねえと変更）エトラは自分の魔力カモフラージュに使うこともある。

ホーリーチエーン

癒す親指の鎖↓鎖を巻きつけた部分の自己治癒力を強化し傷を癒す

ダウジングチエーン

導く薬指の鎖↓錘の形は球。ダウジング効果のある能力で、探し物を発見したり相手の嘘を見抜いたり多彩な使用方法がある。飛んでくる銃弾を察知し受け止めるなど、戦闘にも応用できる。

ジャッジメントチエーン

律する小指の鎖↓対象者の心臓に鎖を巻きつけ、約束を破った場合、鎖が心臓を握り潰し殺害する。エトラの意味で解除されるまで半永久的に効果を発揮する。

+

★希望した相手の心臓に鎖を巻きつけることで、相手の魔力や身体能力が大幅に増える。ただし覚悟が足りなかった場合や、エトラを裏切ろうとしたときには鎖が心臓を握り潰し死に至る。

★神を呼ぶ人差し指の鎖↓天まで伸びていつでもレッサをつかまえて連れてくることができる。連れてこられる途中でミニチュアになるらしい。（原作では人差し指の能力は不明）

★旅団相手にしか使えない、制約と誓約、絶対時間はありません。
それがなくてもエトラは同等の力を使えます。

— — — — —

年齢調節（チート能力）
自由に自分のなりたい年齢になれる。

転移魔法（氷ver.）
体が氷に一瞬で包まれて、次に割れた瞬間には転移している、という技。

ターゲット・オン
標的指定

これからすることの相手を正確に指定することができる。
回復魔法↓アスナへ
攻撃魔法↓学園長へ など。
おっちょこちょいなエトラには最適な魔法☆

エトラさんだよ 2

分かりやすいエトラのチート表（笑）

1. ー
2. 年齢調節の自由
3. 身体能力の向上
4. H×Hの四人の能力＋オリジナル一つ
5. 剣と銃、魔法の扱いの経験
6. 別荘くれ

魔力をアップさせるといふのと見た目をよくしてくれたのは神様のサービスです。

魔法の経験ってことは、修行して魔力も増えてんのか？ ということとで。

ちなみにエトラの別荘は服の倉庫となっております。

神様の趣味もあります、エトラの趣味でもあります。

神様ミニチュアの服もあるとか。

The second day 1

俺はどうやら寝坊してしまっただけだ。

なかなか起きなくてソルトの手をわずらわせたっぽい…。すんません…。

しかもソルトに今の時間を聞いたら十時だって！

こりゃひどいなー。どおりでお腹も空くわけだね…。

夕映待たせてるみたいだし…。明日からはちゃんと起きよう、俺！

お姫様だっこ状態（笑）のままソルトに運ばれ、ダイニングに到着した。

正直いつて恥ずいからやめてほしかったんですがー。

ほら、夕映がぎょつとしてるじゃん！

「エ、エトラさん…。」

うんうん、そうだよね。いい年した俺がね…。男だし…。

きつと、きもーい！と思ってることだろうね…。

「そういう趣味だったんですね…。知りませんでした…。これから私もエトラさんに満足していただけるよう頑張ります！」

夕映がきらっきらした目でおっきな声を出した。

まさかのリアクション！ 予想外…。

「ちがーう！ どうしてそうなるのさ！？ 俺はそんな趣味じゃないって！ ていうかむしろどんな趣味だよそれ！」

「はいはい分かりましたです。早く朝ごはんを食べましょう。」

「夕映！？ 全然分かってないよね！」

「朝ごはんの支度はとくに済んでいます。エトラ様、お早く席にお着きください。」

「リースまでそんな…。」

うう…。夕映にもリースにもスルーされる俺…。唯一の味方はソルトだけだなあ。

「俺にはソルトしかないよ…。」

「大変ありがたいお言葉です。」

やっぱソルトは女神だ…。

あれ…。でもそもその原因ってソルト…？

お姫様だっこしたよね…。…。…。

てーぶるにはおいしそうなりようりがいっぱいだね！

はやくたべたいなあ。

ゆげがあがっててまるでできたてのようだね。

え？ げんじつとうひだって？ なにそれおいしいの？

「エトラさん、食べる前にはきちんいただきますをします。」

「わ、分かってるよ！ いきなり食べたりなんかしないよー。」

「しらー」

声に出してしらーって言われるとキツイって、夕映！

ぐさぐさっ。

そんなに行儀悪そうに見えるの…？

これでも日本人ですから。黒髪黒目に誇り持ってますからね！

「いただきます！」

はい言ったよ。これでいいんでしょー。

それよりこの料理まじでおいしいなあ。誰が作ったんだろうか。

リースかな…。でもずっとここにいたっぽいから違うかも。

夕映の食いつぶりがやばい。俺が寝坊して今十時過ぎだから、けっこう待たせちゃったんだろうな…。

ほんといろんな人に迷惑かけちゃった。反省反省。

で、これからどうするか。

夕映に魔法を教えるのはいいけど、原作にもネギがどんな教え方をしていたかなんてそこまで詳しくはのっていないかったと思う。

火を灯す魔法と風を起こして鉛筆を倒す魔法だった気がするけど…。たしか魔法の勉強もさせていたよな…。

その内容が分からないから困るんだよなあ。

下手に俺が干渉するよりもネギの方が夕映をいい方向にもっていつてくれるのかな…。

でもいまさら変えられないし…。夕映もここまできてやっぱナシっていうのは嫌だろう。

「夕映、ほんとに俺なんかとこれから魔法の練習するのか？俺は基本ができてないから…。もっとちゃんとした人に教えてもらえるのを待つつていう手もあるぞ。」

「とはいっても…。そんな機会がこれからあるのですか？」

「ああ。お前の知り合いに魔法使いがいる。だれとはいわないが…。そいつに教えてもらおうっていうのもアリだと思う。」

「そうですか…。基本は大事ですしね…。その魔法使いさんに話を聞かせてもらって判断したいです。」

その方が賢明だな。だれか一人だけの話しか聞いていないと偏った考えになってしまうこともあるから。

夕映は原作のときも思っていたけれど、頭がいい。こうして目の前にするとよく分かる。

なんで勉強しないんだろう？　むしろ夕映なら授業を聞いているだけで十分大丈夫そうだと思うけど。

まほらはレベルが高いのかねー。

「分かった。そいつに夕映と話してくれるかどうか聞いてみる。」

バレたらオコジョなんだよね。ネギ。

俺がもうバラしてるからネギの責任にはならないと思うけど…。

もしネギの責任になったら俺がかわりにオコジョになるか…。

……ちよつとヤダな。そうなったらクラピーの鎖で倒すしかないな！

ネギ以外のやつに頼むっていうこともできるんだけどね…。

いまいち俺は誰とも親交がないし。

ネギは優しいから困ってたら助けてくれはずだけど、高畑はね…。

俺が最初にいじめちゃったし。お願いするのは無理だろうな。同じく学園長も。

ネギを利用してるようで申し訳ない……。

ま、夕映を修行させることは後々ネギの役にもたてるだろうから、いいっしょ。

「では今日は魔法の練習をしないということは暇ですね…。何をしましょうか、エトラさん？」

「学校のお勉強」

あ、夕映がすごく嫌そうな顔した。

「いやです！ めんどいです。」

「勉強頑張ったらこの別荘にいつでもきていいよって許可出そうと思っただけだなー。」

「……がんばるです。」

「じゃ、ソルト。夕映用に英語の教材持ってきて。」

「承知しました。只今持ってまいります。」

「んー、よろしくー。」

魔法を使う上で英語ができるとお得だろう。

まずは学校の勉強からだな。

覚悟しとけよー。夕映。俺の教え方は厳しいぜ。

俺はドイツ語の方が得意だけど、それでも前は英語もしゃべれたからね。

一日たっぷり英語のお時間ですよー。

ニヤニヤしているエトラを見て冷ややかな目のリースがいたとかい
ないとか。

The second day 1 (後書き)

受験まであと70日ぐらいですよ…。

なにをしてるのやら…。

今回はちよつと会話分を減らしてみました。

あと、夕映はこっちサイドに残ってほしいですか？
神様レッサってぶっちゃけ必要ですか？

みなさんの意見によって考えようと思っています。
感想大募集中です。お待ちしてます。

b y 受験まぎわの冥沙

The second day 2

夕映には英語の勉強をしてもらうことになったけれど、今までサボってきた分はやはり大きい。

これからかなりの量をこなしてもらうことになるだろう。

まずは基礎の基礎の問題集から。

ざっと三冊ぐらい俺がいいと思う本を書庫からとってきた。

いやー便利な世の中になったもんだねえ…。

ほしいと思ったらすぐに手に入るだなんて…！

「夕映ー！ この問題集を明日までに終わらせろよ。」

夕映の前に三冊の問題集を置く。

それだけで夕映は真っ青になった。

「明日までですか…勉強をやるとは言いましたが、それはキツイです…」

「大丈夫いけるいける」

「いや…私には…」

夕映の前に立って、そのまま夕映の顔を両手ではさんだ。

ぐいっと顔を近づけて相手の目を見ながら言う。

こうすると相手が本当のことを言っているのか分かる。

決してキ…、キス…しようとしたわけではないぞ！

……………男のツンデレって…きもいだけだな…

あ、俺がやるからか：

「エトラさん？　どうしたのですか、いきなり固まって。」

夕映がその姿勢のまま動かないことを不思議がって聞いてきた。大事な場面なのに余計なことを考えている場合じゃなかった：

ここは夕映にとって重要なことを話しておかなければならないところだからだ。

「すまん、なんでもない。だが、夕映。これだけはしっかりと聞いてくれ。今、俺が出した課題は本当にお前の力ではできないものなのか？　無理だと決め付けているだけじゃないのか？　お前の魔法に対する憧れはこんなものなのか？　たったこれだけのことで魔法への道が閉ざされるかもしれないんだ。いらついた俺が魔法を教える人を紹介しないと、突然言いだすかもしれないだろう？」

「それもそうですね…。私の考えは甘かったです…。三冊…というのは厳しいですが：今日中に終わらせてみせるです！」

「そっか。ありがとな夕映。お前は本当に強いよ。でもな、俺は、俺が魔法に対して覚悟がないと思ってる。ここまで苦労もあまりしていないから…。お願いだからそんな俺と一緒に…。いや、なんでもない…。じゃあ夕映の勉強を邪魔しちゃいけないから。俺は向こうで訓練してくるよ。　…ソルト、行こう。」

夕映に背を向けて行こうとした俺だが、一言夕映に言い忘れていたことに気づいた。

たった一言だがやる気を起こさせる言葉を、だ。

「夕映。がんばれ…！」

俺がそう言うのと夕映は一瞬こっちを見て微笑み、すぐにまじめな顔で問題集に取り組みだした。

ちなみにここは朝食を食べたところのままだが、リースが食事の片付けはすませているから机には勉強道具しかない状態だ。

これなら集中して夕映も取り組めるだろう。

リースも飲み物とかお世話してくれるだろうし。

夕映ががんばっている間に俺もがんばらないと…！

まず俺は念能力を使いこなせるようにならないと。

この世界にはこのようなタイプの能力はないから、相手にとってイレギュラーな能力になり、こちら側が戦闘の際とても有利になるからだ。

一番基本的なクラピカ的能力からもう一度練習しよう。

まだ使いこなせているわけではないし。

ちよっと申し訳ないが…、ソルトには練習台に…。

別に朝のことを根にもってるわけじゃないよ？ ……ないよ？

「ソルトいっくよー！」

「エトラ様。とても笑顔ですよ。なぜですか。」

ソルトがちよいちよい後退していく。

俺はニヤニヤ近づいていく。二人の距離は一向に変わらない…。

「けっけっけ…」

「犯罪者のソレですね。分かりました。エトラ様自らなりきり私に耐性をつけさせようと、わざと…。なんてお優しい…。」

うっ…。無表情でそんなあからさまな嫌味を言い切られると逆にキツイものが…！

ごめんソルトもうお前はいじめないよ…。

だって俺がもたない…。

俺はもう諦めて一人で柱に鎖をとぼしたり、巻きつけて破壊したりして練習していた。

これだけじゃあ俺、実戦で役に立たないからだれかに相手を頼まないとなあ…。

あ…ネギか…！

だめだだめだ…いじめになっちゃうし…。

あいつとは戦闘タイプが違うから練習しづらいなあ。

はあ…。

いちおう戦闘経験はレッサ（神）にもらったけど、夕映にあんなこと言った手前、どうしても危険な場面でもない限り既に用意された経験なんかに頼りたくない。

なんで俺レッサにあんなこと頼んだんだろう…？

甘いなあ…俺も……。

これからもっと強くならないと…。

せめて俺がまきこんだ夕映と、自分自身、これぐらいは最低でも守る力がほしい。

こんな世界に来て初めて分かる。

ネギって甘ちゃんだけど、やっぱすごいよ。

学園長の手の上で踊ってるだけかもしれない…、でも、それでも、確実に毎戦強くなってる。

勝たなきゃいけないとここではきちんとしてるんだ。

あの狸じじいのいらん手助けさえなければ、現実を知って信念ももっとよくなっていただろうに…。

俺は、ネギまの中でカモと学園長こそが悪役だとおもうんだが…。

いけないいけない。練習に集中しないと…。

どうも一人だと気が散ってしまう…。

The second day 2 (後書き)

お久しぶりです。

無事に第一志望に合格いたしました。

今回は改行を少なくしてみました：：どうでしょうか？

誤字脱字はわたしも確認はしていますが、見つけたら気軽に感想にでも書いていただけたらありがたいです^^

冥沙

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4678m/>

ネギま！ てきとーにエンジョイするぜ！

2011年2月23日23時56分発行